

[実践記録]

小学校におけるハテナソンの実践

— 主体的・対話的で深い学びを実現するための手法として —

吉 井 優太郎

木 村 成 介

要 旨

本稿では、京都市立梅小路小学校6学年対象の社会科授業におけるハテナソンの実践について報告する。本実践では、「武士の世の中へ」という単元の導入でハテナソンを実施し、講義型授業を展開した後、まとめとしてパフォーマンス課題に取り組んだ。実践後の聞き取り調査の結果などから、ハテナソンには、学習内容の見通しを持ちやすくなる効果や、単元の内容への興味関心を高める効果があることが確認できた。

1. はじめに

平成29年3月に公示された小学校学習指導要領「総則」の「第3教育課程の実施と学習評価 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」には、「児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」とある^[1]。このような学習の充実には、いわゆるアクティブラーニングの手法が有効であると考えられるが、児童の発達段階や教師の力量を考慮した場合、小学校教育への導入には課題も多い。本論文では、「ハテナソン」という新しい教育手法を小学校の教育現場で実践し、その有効性について検討した。

ハテナソンとは、「はてな(?)」と「マラソン」を組み合わせた造語であり^{[2][3]}、アメリカのThe Right Question Instituteのダン・ロスステイン氏らによる質問づくりの手法(Question Formulation Technique)をもとにして^[4]、佐藤賢一氏により開発、実践されているグループワークである。ハテナソンの詳細については、木村らの文献^[3]に詳しく説明されているが、基本的には以下の8つのステップからなるワークを3~6名程度のグループで取り組む構成となっている。これら各ステップの詳細については後述の実践記録で示す。

- ① グループ分け
- ② 質問づくりのルールの説明とグループ内共有
- ③ 質問の焦点（テーマ）の説明
- ④ 質問づくり
- ⑤ 質問の分類と変換
- ⑥ 質問の選択
- ⑦ 質問の共有
- ⑧ 振り返り

ハテナソンは、ある事柄（質問の「焦点」）について、発散的に質問（疑問）を作る作業をベースにしている。教育現場においては、教科内容に関する事柄についての質問を生徒や児童が自ら作ることで、教科内容への興味関心を高めるだけでなく、学習への主体的な取り組みを促す効果が期待される。実際、ハテナソンは、中学、高校、大学の様々な現場で実践されるようになってきており、その効果が確認されつつあるところである。一方で、小学校における実践についてはこれまで報告がない。

上述のとおり、小学校においても「主体的・対話的で深い学びの実現」がうたわれるようになり、いわゆるアクティブラーニングの導入が進められているところである。筆者は、小学校教育においてもハテナソンが有効であると考え、多くの実践を重ねてきた。本稿（本記録）では、その取り組みの1例を報告し、小学校教育におけるハテナソンの有効性について検討する。

2. 教育内容の設定とハテナソン導入のねらい

本実践では、小学校第6学年の社会科の授業においてハテナソンを導入した。実践を行った単元は「武士の世の中へ」（大日本図書）である。この単元では、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いなどについて調べることにより、武士による政治が始まったことを学ぶ。鎌倉幕府が「ご恩と奉公」の関係で成立していたこと、また、元寇ではこの関係が成立せず、武士の不満が募ることで鎌倉幕府が衰退していった歴史を、源頼朝や竹崎季長のエピソードや様々な図表を通して理解していく。

今回は、学びの出発は児童たちのハテナ（疑問、問い）であるべきだという思いから、単元の初めにハテナソンを導入することにした。ハテナソンを導入することで、児童がわかっていることを認識し、また、本単元で学習する教科内容への興味や関心および意欲を引き出すことができるのではないかと考えたからである。なお、今回の実践の対象となった児童は、これまでも社会科の他の単元や算数科などでもハテナソンに取り組んだ経験がある。

今回のハテナソンでは、主体的・対話的で深い学びを実現するため、「パフォーマンス課

題」^{[5][6]}と合わせて取り組むことにした。パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを統合して使いこなすことを求めるような複雑な課題のことである。パフォーマンス課題では、児童に論文、レポート、展示物の作成やプレゼンテーション、スピーチなどの実演を課して、その結果を評価する。客観テストでは評価しきれない学力を評価できるだけでなく、児童が自らの力で複雑な課題に取り組むこと自体に教育効果が期待できる。

実践後は、筆記テスト、パフォーマンス課題のレポート、児童からの聞き取りにより実践の効果を評価し、ハテナソンとパフォーマンス課題という2つの取り組みを組み合わせることで、児童の興味関心を高め、主体的な学びを引き出せたかどうかについて検討した。

本実践における授業展開の概要を表1にまとめた。

表1 授業展開の概要

時		学習内容の概要
1	導入、ハテナソン	「武士の世の中へ」を質問の焦点とした質問づくりを行い、学習の見通しや意欲をもつ。
2	展開1	平治の乱、源平の戦いについて教科書の図表を用いて調べ、貴族の世の中から武士の世の中に移り変わったことを理解する。源頼朝のエピソードについて学ぶ。
3	展開2	鎌倉幕府の政治と、幕府と武士とのつながりについて調べ、どのような国づくりが行われたのかを理解する。北条政子の言葉（演説）について考える。
4	展開3	元との戦いの様子を調べ、幕府と武士の関係が崩れ、幕府の力が衰えたことを理解する。竹崎季長のエピソードについて学ぶ。
5	まとめ、パフォーマンス課題	「鎌倉時代にタイムスリップして源頼朝の側近として生活することになった。幕府の存続のためにどのように生きますか。（側近で影響力は大きく考えは反映される。教科書も一緒にタイムスリップしている。）」というパフォーマンス課題に取り組む。

3. 授業実践

3-1 授業展開

本単元（武士の世の中へ）に係る授業は、全5時間で構成され、2017年6月から7月にかけて行われた。資料1に、本単元の学習指導案を示した。ハテナソンは、単元の初回授業において実践された。

3-2 ハテナソン授業の概要

ハテナソンを実践した授業の概要については、以下の通りである。

実践日：平成 29 年 6 月 16 日 4 時間目

実践場所：京都市立梅小路小学校、6 年 1 組教室

教科：社会科「武士の世の中へ」

教科書：大日本図書

対象：第 6 学年児童 22 名（男子 14 名、女子 8 名）

指導者：吉井優太郎

3-3 ハテナソン授業の実践内容

授業実践は、『たった一つを変えるだけ：クラスも教師も自立する「質問づくり」』（ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ（2015））^[4] や、木村らの方法^[3] を参考にして、次の手順で行った。

まず、児童を 3 人ずつの 7 班のグループに分け、質問づくりのルールについて説明した。ただし、児童たちはすでにハテナソンを複数回経験しているので、簡単な説明にとどめた。その後、質問の焦点を「武士の世の中へ」として児童に開示し、グループごとに質問づくりを行った。図 1 に、各グループから出された質問（質問が記載されたホワイトボード）をまとめた。

次に、出された質問を、閉じた質問（「はい」や「いいえ」、もしくは「一言」で一義的に答えられるような質問）と開いた質問（答えるのに説明を要するような質問）に分類し、閉じた質問と開いた質問を変換するワークを実施した。

最後に、作り出された質問の中から、自分たちが答えを知りたいと思う質問を 3 つ選択させた。選択した質問と選んだ理由について、それぞれの班ごとに発表させ、教室全体で共有した。最終的に児童たちが選択した 3 つの質問については、表 2 にまとめた。

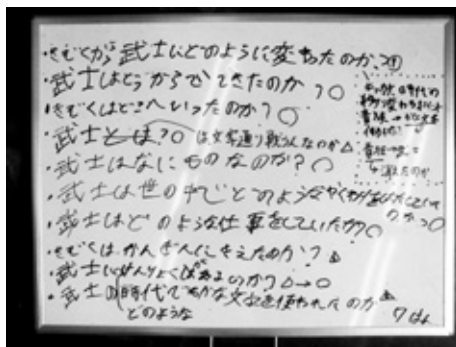
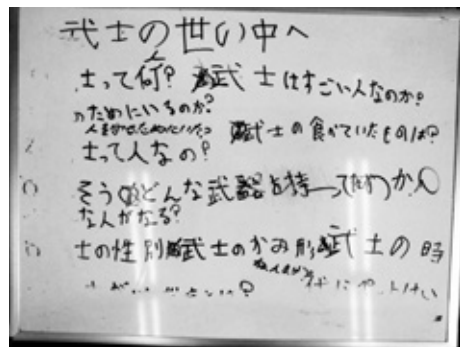
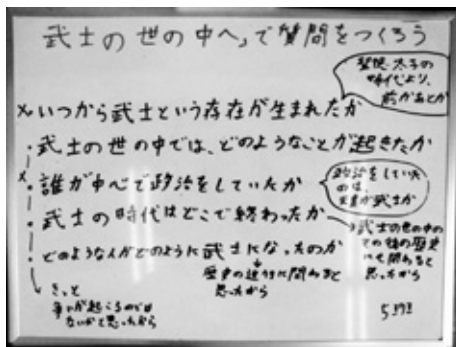
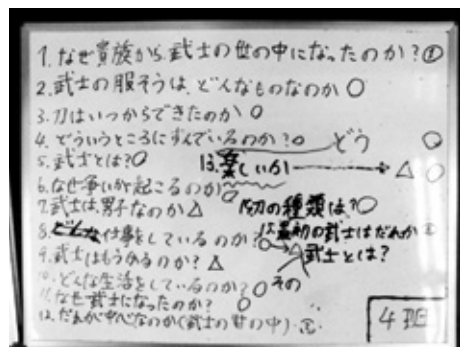
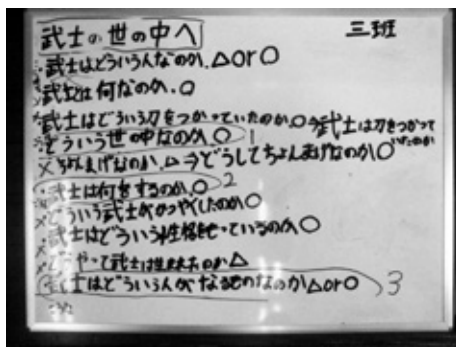
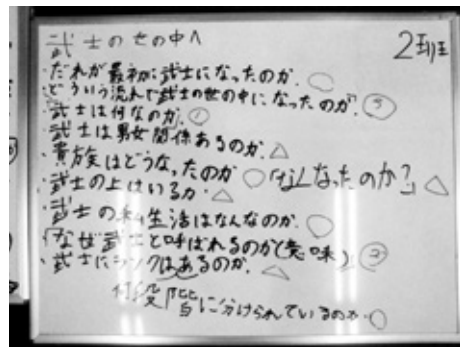
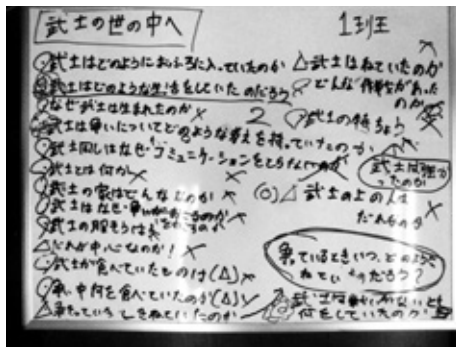


図1 各グループにより作られた質問

表2 児童たちにより選ばれた3つの質問

1 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武士はどのような生活をしていたのだろうか ・ 武士は争いについてどのような考えをもっていたのか ・ 武士は戦いが無い時には何をしていたのか
2 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武士は何なのか ・ なぜ武士と呼ばれるのか（意味） ・ どういう流れで武士の世の中になってのか
3 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ どういう世の中なのか ・ 武士は何をするのか ・ 武士はどういう人になるものなのか
4 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ なぜ貴族から武士の世の中になったのか ・ だれが中心なのか（武士の世の中） ・ 最初の武士はだれか
5 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武士の世の中ではどのようなことが起きたか ・ 武士の時代はどこで終わったか ・ どのような人が武士になったのか
6 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武士って何 ・ 武士は何のためにいるのか ・ どんな人になるのか
7 班	<ul style="list-style-type: none"> ・ 貴族から武士にどのように変わったのか ・ 武士の時代でもかな文字が使われたのか ・ 貴族は完全に消えたのか

3-4 ハテナソン後の授業展開と効果測定

今回の実践では、単元の初回にハテナソンを導入し、3回の授業で単元の内容を展開した。そして、単元の最後に「鎌倉時代にタイムスリップして源頼朝の側近として生活することになった。幕府の存続のためにどのように生きますか。（側近で影響力は大きく考えは反映される。教科書と一緒にタイムスリップしている。）」という課題（パフォーマンス課題）を出し、自由に記述させた。パフォーマンス課題に取り組む前には、「信長協奏曲」というドラマ（信長の時代にタイムスリップするという内容のドラマ）の映像の一部を見せ、より課題に意欲的に取り組めるように工夫した。単元の終了後には、カラーテスト（業者作成の単元テスト）で単元の内容の理解度を測定するとともに、授業内での児童への聞き取りにより、ハテナソンの効果を検討した。

3-5 実践の評価

実践における教室の様子を図2に示したが、児童たちは、概ねハテナソンに意欲的に、かつ、楽しく取り組むことができていたようである。児童への聞き取りでは、「質問を作ることで何

について学んでいくかが意識できた。」「質問を作るたびにいろいろなことが考えられるようになっていく。」といった好意的な声が多く聞かれた。また、グループで役割（司会、書記、発表など）を分担しながら一つのワークに取り組んだのも良い経験になったようである。単元の終了後に実施したカラーテストでは、学級平均が88点と普段と比べるとやや高い平均点となった。また、普段低い点数しかとれない児童が、いつもより良い点数をとっている傾向がみられた。今回の実践では、パフォーマンス課題にも取り組んでいるため、ハテナソンだけの効果とはいえないが、児童の感想やカラーテストの結果を総合的に評価すれば、ハテナソンには一定の効果があつたと推察できる。単元の導入部分でハテナソンを実施することで、今後何について学んでいくのか見通しを持ちやすくなり、また、単元内容に関しての興味関心を引き出すことができたのではないかと考えられる。

今回の実践ではいくつかの課題も見えてきた。まず、児童により作られた質問や選択された質問が、教員側の意図からずれてしまうことがあるということである。ハテナソンは主体的かつ発散的に質問を作ることを基本とするため、教員側の意図と合わない質問がでてくることは許容すべきであるが、得られた質問を授業展開に活かそうと考えたときには問題となりうる。今回の実践の対象となった児童たちは、これまでに数回ハテナソンを経験しているが、「初めての時は何を質問すればいいかわからなかったけど、回数を重ねるごとにどのような質問をすればいいのかわかってきた」という声が聞かれた。指導者の実感としても、ハテナソンの回数を重ねるたびに作られる質問が多様なものになってきており、また、その中から優先順位の高いものを選ぶ段階でも、見当はずれなものが減ってきていると感じている。アクティブラーニング的な手法全般にいえることであるが、ハテナソンのような取り組みは1回の実践で十分な効果が得られるものではなく、繰り返し実践することが効果を高めるのに重要であると考えられる。

2つ目の課題として、ハテナソンで作られた質問をその後の授業にどのように活かしていくか、という点があげられる。今回の実践では、まとめとしてパフォーマンス課題に取り組んだこともあり、単元の初めに作った質問を活かしきれていないように感じた。単元の終了後に作った質問を見直し、児童たちにそれぞれの質問に対する答えを考えさせてみたところ、「あ、分かるようになっていく！」という声が多数あがったことから、パフォーマンス課題などの評価レポートと質問をうまく接続することで、児童自身が質問を作る意味や意義を理解することができれば、より高い教育効果が期待できるのではないかと考えられる。

ハテナソンでは、自分の出した質問が他者から評価されることなく平等に扱われるため、児童たちは安心してグループワークに取り組むことができる。また、どんな子であっても、回数を重ねることで質問を作ることができるようになる。これまでの社会科の学習でも、学習課題を児童たちで作るという取り組みは重要視されてきた。これを、ハテナソンという形で行うことで、簡単かつ効果的に、子どもたちの意欲を高められるのではないかと考えている。

ハテナソンで自分の声（質問）が届くことはやはりうれしいことのようにあり、本実践でも児童たちが積極的に取り組みながら質問を出す姿が見られた。一方、授業において、児童たちのハテナ（疑問）を生かすのは教師の専門性である。児童たちの疑問をうまく受け止めて授業を展開し、深い学びを引き出すことが重要である。



図2 ハテナソン授業の実践の様子

4. おわりに

本稿では、小学校社会科授業でのハテナソンの実践について報告した。今回の実践で、ハテナソンが学習に有効であることが確認できたとともに、さまざまな課題も見えてきた。筆者は、さまざまな現象や事柄に興味を持ち、「なぜ?」「どうして?」と問い続けることができる児童を育成することが重要であると考えており、ハテナソンの可能性に期待している。今後は、ハテナソンを小学校の教育現場のさまざまな場面で導入し、課題を一つ一つ解決しながら、主体的・対話的で深い学びを実現するための教育手法として確立していきたい。

5. 参考文献

- [1] 文部科学省（2017）小学校学習指導要領
- [2] 佐藤賢一 ハテナソンプログ [hatenathon](http://ha-te-na-thon.hatenablog.jp/) : <http://ha-te-na-thon.hatenablog.jp/>
- [3] 木村成介、佐藤賢一（2017）「自ら問い、自ら考えるハテナソンによる実験授業の活性化と学びの深化」京都産業大学教職研究紀要 12 号 : pp.43-86
- [4] ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ（2015）『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論
- [5] 西岡加名恵編著（2008）『「逆向き設計」で確かな学力を保证する』明治図書
- [6] 西岡加名恵・田中耕治編著（2009）『「活用する力」を育てる授業と評価・中学校』学事出版

(資料 1) 社会科学習指導案

指導者 京都市立梅小路小学校

吉 井 優太郎

1. 日 時 平成 29 年 6 月 16 日 (木) 第 4 校時 (11:35~12:20)

2. 学年・組 第 6 学年 1 組 (22 名)

3. 単 元 名 武士の世の中へ

4. 単元目標

- ・武士のくらしの様子や願いを、文化財、地図や年表などの資料を活用して調べ理解し、武士による政治が始まったことやそれらにかかわる人物の願いや働きについて考え、表現する。

5. 単元の評価規準

【社会的事象への関心・意欲・態度】

- ・武士のくらし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産に関心をもち、意欲的に調べている。

【社会的な思考・判断・表現】

- ・武士のくらし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産について、学習問題や予想、学習計画を考え、表現している。
- ・武士による政治が始まったことやそれらにかかわる人物の願いや働き、代表的な文化遺産の意味などについて思考・判断したことを根拠を示して説明している。

【観察・資料活用の技能】

- ・武士のくらし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産について、文化財、地図や年表、その他の資料を活用して必要な情報を集め、読み取っている。
- ・調べたことを年表や作品などにまとめている。

【社会的事象についての知識・理解】

- ・源頼朝が鎌倉に幕府を開き、武士が勢力をもつようになったことを理解している。

6. 単元の趣旨

本学級の児童は、歴史学習に対して意欲的に取り組んでいる。空き時間に歴史に関する本やマンガを読んだり、自主学習ノートに歴史的事象をまとめたりする姿も見られる。

これまで授業を展開するにあたっては、教科書に記述されている歴史的事象の知識理解の場に留まらないよう、各時間の学習問題に対する予想をたて、それについて、教科書や資料集などを使って調べる時間を設定するようにしている。また、各単元の終わりには、資料集の年表

を活用し、まとめていくことで、大きな歴史の流れをつかみながら学習を進めている。

6年生になり歴史の学習を始めるときに、「どうして歴史を学ぶのか。」と子どもたちに投げかけた。子どもたちはいろいろな声を出してくれた。その中で「これからの未来を創るために、これまでの歴史を知り、生かすことが必要だ。」という考えに落ち着いた。そこで、これまでの学習のまとめの時に、この単元で学んだことを未来にどのように生かすかをノートに書き溜めてきていた。

そして今回、学習問題を自分たちから生み出し、それについて考えを深めていくことのできる学習になるように単元を構成した。自分たちの気づきや考えから出発したものであるからこそ、主体的に学習を進めていけると考えたからである。さらに、歴史の学習は一つだけでなく、それ以前の流れも大きく関係しており、既習の学習をつなげていくこともできると考えた。

子どもたちの作った質問を1時間の学習の大きな学習課題とし、予想を立てたうえで教科書や資料集を用いて調べ、学んでいくことにする。

7. 単元の指導計画（全5時間）

過程	学習のねらい	○学習内容 *留意点	・学習活動 ◇児童の反応	評価の重点				評価の視点 (評価の方法)
				関	思	技	知	
	武士の世の中についての質問を考えることで学習の見通しをもつ。【思①】 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 「武士の世の中へ」を焦点に質問をつくろう。 </div>	・「武士の世の中へ」を質問の焦点とした質問づくりを行い、学習の見通しをもとう。 ◇なぜ力をもっていた貴族から武士の世の中へ変わったのだろう。 ◇武士はどのようなことを大切にしていたのだろう。			○			・武士はどのような願いをもって政治を行おうとしたのか、質問をつくっている。 (ホワイトボード)
であ う・ つか む	武士の生活について意欲的に調べ、武士はどのような政治を行おうとしたのかについて 【関①】	・武士のやかたの様子（想像図）を見て、武士はどのような人々で、どのようなくらしをしていたのか、読み取ったことを話し合おう。 ◇武士のくらしは質素である。 ◇領地を守るために武芸にはげんだのだ。 *P48の武士のやかたの様子（想像図）とP40の貴族のやしきの様子（想像図）を比較することで、貴族と武士の生活のちがいを想像することができるようにする。 ○《つかませたい内容》と用語・語句	○					・武士の生活の様子、貴族の生活との違い、武士の思いや願いについて関心をもち、意欲的に調べている。 (発言・行動観察)

		貴族が都ではなやかな生活をしている一方、地方の有力な農民は、田畑を切り開いて領地を拡大し、自分の領地を守るために武芸にはげみ、武士となった。				
		領地、豪族、武士、武芸				
調べる	武士の政治の始まりについて、資料を活用して調べ、源平の戦いで源氏が平氏に勝利した理由を考えられるようにする。 【技①】【思②】 武士はどのようにして勢力をのばしたのだろうか。	「武士の政治の始まりと源平合戦」(1時間) ・武士はどのようにして力をつけてきたのかを調べよう。 ◇武士の中でも平氏と源氏が力をつけたのだ。 ◇平清盛の、娘を天皇のきさきにし、平氏一族が朝廷の重い役職を占めるというやり方は、貴族の藤原氏と似ている。 ◇平清盛を中心とする平氏が、貴族の藤原氏に代わって政治を行うようになったが、平氏が政治を思うままに動かすようになると、貴族や武士たちの間で不満が高まったのだ。 * P50 の平清盛の年表などの資料から、どのように武士の平氏が力を付けてきたか読み取るようにする。また、藤原氏のやり方と比較し、平氏への不満が高まったことを理解できるようにする。 ・源氏と平氏の争いは、どのような結果になったのかを調べ、源氏が平氏に勝利した理由を考えよう。 ◇平氏に不満をもっていた武士たちが、自分たちの領地を認めてくれる源頼朝のところに集まってきて政治を行うようになった。 * P50 の源頼朝の年表と平清盛の年表を比較したり、P51 の源氏の軍の進路を関連付けたりすることで、源氏がどのように平氏を破ったのかを読み取るようにする。 ○《つかませたい内容》と用語・語句		○		・武士の政治の始まりについて、絵図や年表などの資料を活用して調べ、武士が力をつけて政治を動かすようになっていったことを読み取っている。(ノート)

		武士の中で勢いが強かった平氏は、平清盛を中心に、藤原氏に代わって政治を行うようになったが、貴族やほかの武士たちの間で不満が高まり、源氏が平氏を滅ぼし、源頼朝が征夷大將軍になり鎌倉幕府を開いた。					
		幕府、征夷大將軍、武士団、 源平合戦、源頼朝、平清盛、 源義経					
鎌倉幕府がご恩と奉公の関係で武士たちを従えたことや、朝廷の軍を破って、その力が西国にまで及ぶようになったことを理解できるようにする。 【知①】 源頼朝は、どのようにして武士たちを従えていったのだろうか。	「頼朝が東国を治める」(1時間) ・源頼朝がどのようにして武士たちを従えていったのかを調べよう。 ◇頼朝は、手がらをたてた武士に新しい土地を与えたところが、清盛とちがう。 ◇源頼朝は、ご恩と奉公の関係で武士を従えたのだ。 ◇鎌倉に幕府を置き、東国を中心に支配し、朝廷の支配を受けないようにしたのだ。 * 源頼朝と平清盛の人物像(考え方・行動)に焦点を当て、比較して考えることで、源頼朝がどのようにして武士たちを従えたのかを考えるようにする。 * 幕府が置かれた鎌倉を地図で確かめ、京都との距離を意識させるようにする。 ・源頼朝死後、朝廷から幕府をたおす命令が出された時、鎌倉幕府の武士たちはどうしたのかを話し合い、その後の鎌倉幕府の力を調べよう。 ◇朝廷に味方せず、幕府を守ったところから、ご恩と奉公のつながりの強さが分かる。 ◇承久の乱の後、鎌倉幕府の力は西国にまで及ぶようになり、執権の北条氏を中心とした幕府は、法律(御成敗式目)や裁判の制度を整えて支配力を強めていったのだ。 ○《つかませたい内容》と用語・語句				○ ・鎌倉幕府が御恩と奉公の関係で武士たちを従えたことや、朝廷の軍を破って、その力が西国にまで及ぶようになったことを理解している。(ノート)		

		源頼朝は征夷大將軍となり、ご恩と奉公の關係で武士を従えた。承久の乱の後、幕府の力は西国にまで及ぶようになり、執権の北条氏を中心とした幕府は、法律や裁判制度を整えた。				
		御成敗式目、執権、北条氏、 ご恩と奉公				
鎌倉幕府が衰退した理由を元との戦いと関連付けて考えられるようにする。 【思③】	鎌倉幕府は、どのようにして元軍と戦い、その後はどうなっていたのだろうか。	<p>「元の大軍がせめてくる」(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元が攻めてきた経緯を知り、鎌倉幕府は、どのようにして元軍と戦ったのかを調べよう。 ◇中国を従えた元が日本も従えようと使者を送ってきたが、それを退け戦いになった。 ◇元は2度にわたって九州の北部を攻めてきた。 ◇武士たちは、元軍の集団戦術や火薬兵器(てつほう)などに苦しみながら、恩賞を得るため一所懸命戦ったのだ。 ◇北条時宗は、博多湾に防塁を築いたり、全国の武士を動員したりして九州の守りを固めたのだ。 ◇武士たちの激しい抵抗や暴風雨などにより、元軍を追い払ったのだ。 * P54 の元と日本の国土の大きさや元との戦いの絵図などの資料から、国土や戦いの方法に大きな違いがあることを読み取ることができるようにする。 ・元軍を追い払ったのに、なぜ鎌倉幕府の力は弱まっていったのかについて話し合おう。 ◇幕府は元を退けただけで、新たに土地を得たわけではなかったため、武士たちに新しい領地を与えることができなかったのだ。 ◇奉公したのに、ご恩が得られないと、幕府と武士との関係が崩れ、幕府への不満がたまっていったのだ。 * 教科書の挿絵から竹崎季長のエピソードについて学ぶ。 				
			○			・鎌倉幕府が衰退した理由を元との戦いと関連付けて考え、適切に表現している。(ノート)

		○《つかませたい内容》と用 語・語句					
		元は日本に服従を求めてきたが、北条時宗が退けた。全国から集まった武士は恩賞を得るために一所懸命に戦ったが、領地を与えられず、幕府と武士の関係が崩れた。					
		てつはう、一所懸命、元寇、 北条時宗					
ま と め る	パフォーマンス課題 に取り組む。 【技②】	<p>「まとめる」(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでに学んだことを生かしてパフォーマンス課題に取り組もう。 <p>「鎌倉時代にタイムスリップして源頼朝の側近として生活することになった。幕府の存続のためにどのように生きますか。(側近で影響力は大きく考えは反映される。教科書も一緒にタイムスリップしている。)」という設定の問題に対して論述する。</p> <p>*意欲を高めるために同じような設定の映画である「信長協奏曲」の映像を見せる。</p>			○		<ul style="list-style-type: none"> ・武士の発生から元寇までの主なできごとと、人物の願いや働きを相互に関連付けて振り返り、自分なりの考えを表現している。(ノート)